

令和元年6月21日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02374

研究課題名(和文)『狭衣物語』巻一・巻二における異本系本文の研究

研究課題名(英文)A study of different texts in "Sagoromo Monogatari" Vol.1and Vol.2

研究代表者

今井 久代 (IMAI, Hisayo)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：90338955

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：『狭衣物語』の多様な本文を大きく三つのグループに分けた際の「異本系」(第二系統、第二種とも)の本文について、巻一および巻二を中心に詳細な読解を行った。

異本系本文は、他二グループと比べても際だって多くの独自異文および欠文を抱えているが、決して場当たり的な改変、ただの要約や説明の付加ではない。違う写本であるが、この系統での一貫した論理性が確認できる。総じて、他二グループと同じプロットを持ち、同じ『源氏物語』の人物像や人間関係をモチーフとしながら、他二グループに比べても遜色ない、深い『源氏物語』の理解にもとづいた改変がなされていることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

異本系本文は、原典ができてから40～50年ほど後に改変された本文と推定されており、原典を求めて精読するという従来の本文批判研究においては、他の二グループに比べて、その本文の様態についての考究がほとんどなされてこなかった。

しかし『狭衣物語』の場合、『源氏物語』とは比べものにならない多種多様な本文が残されている。それはすなわち、書写において自由な改変が行われてきたことを意味しており、改変を許容する流動性を含めて、この作品を評価することが肝要である。その意味で、成立後約半世紀での改変本文の全体像を確認し、改変の様相や質的達成について評価する意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：I researched the "different book system" of "Sagoromo Monogatari" (also known as the "second system" or the "second type") when dividing the various texts of the story into three major groups, by reading and comprehending the texts of the story, mainly Volume 1 and Volume 2, in detail.

The texts of the "different book system" have a lot of unique different sentences and lost sentences compared to the other two groups of the story. However, these sentences are not ad hoc modifications, or mere summaries or addition of explanation. While the "different book system" is a "different" group of the story, a consistent logic can be found throughout this system. I have found out that the "different book system", as a whole, has the same plots of the other two groups and are modified, comparing favorably with the other two groups, based on a deep understanding of "Genji Monogatari" in the motif of similar human characters and relations in it.

研究分野：日本古典文学

キーワード：狭衣物語 異本系本文

1. 研究開始当初の背景

『狭衣物語』全四巻は、『源氏物語』の多大な影響を受け、11世紀後半(1080年ころ)に創作された人気作で、『源氏物語』同様に多数の写本が現存する。ただし、本文の異同がさほど大きくない『源氏物語』とは異なり、『狭衣物語』には意図的な改変としか思えない、大きな違いを内包する多様な本文が残されている。とはいえ『狭衣物語』においても、従来の本文批判と同様に「原典に近い本文」を見定めて解釈を深めるべく、研究が重ねられてきた。

現在では、中田剛直(『校本狭衣物語 巻一～巻三』桜楓社、1976～80年)、あるいは三谷栄一(『狭衣物語の研究 [伝本系統論編]』笠間書院、2000年)の提唱した三分類が、各グループの呼び方や、典型本文の認定など、細かい部分についてはまちまちながら、いちおうの通説的理解と言ってよいだろう(片岡利博『異文の愉悦 狭衣物語本文研究』笠間書院、2013年)。

すなわち

a 深川本(伝坊門局筆本)に代表される系統(中田:第一種第一類、三谷:第一系統)

b 異本の系統(中田:第二種、三谷:第二系統)

c 流布本に代表される系統(中田:第一種第二類、三谷:第三・四系統)

の三つに分類する理解である。「諸本は三つの各々に系統づけられるか、しからずばこの三系統の混合」(三谷栄一前掲書 p154、初出は1935年)というのが、現在の通説的理解である。

しかしながら、この三つのグループのうち、どのグループの本文がより原典に近いかにについては、a 深川本の系統(三谷栄一)、c 流布本の系統(片岡利博など)が鋭く対立し、近年ではやや、c 流布本の系統説の方が優位と思われるものの、決着には至っていない。また c 流布本の系統については、ここに便宜上分類されている感のある写本が多く、諸本の様態は実に多様で、実際のところどの形が典型であるのかもはっきりしない。現在流布本と呼ばれているものは、連歌師の間で伝えられてきた写本が江戸時代に版本とされて広く流布したもので、直接は室町時代の写本を版本としたものである。これに近い形の本文は、鎌倉時代の古写本にも確認し得るようであるが、きちんと検証するには至っていない。ここに分類されている実に多様な本文については、そのバリエーションが多すぎるために、分類し批判するのは容易ではない。

このように、原典の形の共通理解までは至らずに混とんとしたまま、a 深川本系では深川本と内閣文庫本、c 流布本系では春夏秋冬四冊本と元和九年古活字本、というふうに、一部の写本についてはそれぞれを底本とする注釈書が刊行されて、読解が進んでいる。すなわち、深川本については小学館の新編日本古典文学全集とおうふうの『狭衣物語全注釈』、内閣文庫本については岩波書店の日本古典文学大系、春夏秋冬四冊本については新潮社の日本古典文学集成、元和九年古活字本については朝日新聞社の日本古典全書が刊行されており、それぞれのテキストをもととしての作品研究も重ねられている。

2. 研究の目的

本研究では、上記3つの系統のうち、研究が遅れ、注釈的読解がまったくなされていない、『狭衣物語』の b 異本系統の本文の実態を明らかにすることを目的としている。

これまで、b 異本系統の本文については、

原典そのものではなく、原典の成立後の改変本文である。

ひとつの写本にそろってこの系統の本文が収まっているわけではない。

といった理由から、他二系統に比べてその本文研究が遅れてきた。

しかしながら、このように多様な本文が生まれ、現存することになった状況を考えたとき、単純な書き間違いや書写ミス、あるいは小さく気まぐれな改変といったレベルの書き換えの積み重ねだけでは、説明しきれないだろう。やはりどこかで意図的で大掛かりな改変がなされ、その後も自由に部分部分の書き換えや、他写本の本文の吸収が行われてきた、場合によっては統一的な改変も目指された、といった道筋を想定すべきであろう。その意味で、改変であることが明白で、かつ中田剛直によって、流布本とまったく違う様態の本文として第二種に分類された、b 異本系の本文は、もっと注目されてしかるべきである。

すなわち、中田剛直は流布本を基準として、第一種第一類、第一種第二類とグループ分けし、さらにそれぞれのグループをABC...と細分化した。流布本は第一種第二類のABC...の一番最後におく形である。そのなかで中田が「第二種」と、全く別のグループとして命名したことは、異本系の本文がそれだけ独自の異文や欠文を多く抱えていたことの表れである。その一方で、第一種第一類Aや第一種第二類Aには、異本系と近い文が時折混じっている。こうした本文の状況から、片岡利博は、c 流布本系の本文を改変してb 異本系の本文が成立したあと、c 流布本系の本文をもとにb 異本系の本文を一部吸収しながら改変が行われ、成立したのがa 深川本系であるとした。だとすれば深川本が「しからずばこの三系統の混合」の「混合」とは違う、一つの系統と見なされるには、この本文独自の統一的改変の意図、いわゆる主題、物語の論理が必要となるだろう。

翻って、他のグループの写本類とは、すでに大きく異なる性質を持っていることが確実で、かつ原典の成立からおよそ半世紀のちの改変であるらしい(三谷栄一「狭衣物語の異本成立とその時期 巻一を中心として」『日本文学研究資料叢書 平安朝物語』有精堂、一九八〇年。初出は一九六九年)、深川本系その他の本文にも大きな影響を与えた異本系本文の「改変」の

質を見極めることは、『狭衣物語』が原典からの改変を許容して、多種多様な本文を生み出してきた、その原動力を見極めることにも繋がるであろう。

こうした目論見のもと、従来看過されてきた異本系本文の実態、その改変の質の評価が、本研究の目的である。

3. 研究の方法

『狭衣物語』は全四巻からなる。このうち本研究では、まず巻一巻二を対象とした。巻一はともに鎌倉時代の書写と推定される、伝慈鎮本と為家本がこの系統の本文をもつとされる。一方巻二は、鎌倉時代の書写とされる伝民部卿筆本(全体の五分の三程度までの零本)、南北朝期の書写とされる九条家旧蔵本、及び鎌倉時代の書写ながら流布本系との混合である平瀬本が、この系統の本文をもつことがわかっている。

このように複数の、全く別の写本に残る本文の形を比較検討しながら、最善本と思われる本文を対象に選び、注釈読解してゆく。具体的には、巻一は伝慈鎮本を中心に据えながら、途中までは紅梅文庫本を時に参観し、天稚御子降臨場面以降は伝為家本の本文を視野に入れて、本文を定め、注釈してゆく。また巻二は、伝民部卿筆本を中心に据えながら、伝民部卿筆本のない部分は平瀬本(はじめの方の部分)および九条家旧蔵本で補う。平瀬本の本文のうち、異本系本文となっている部分は、特に九条家旧蔵本の読解の際には、参考として必ず言及する。なお為家本は『狭衣物語諸本集成第二巻』(笠間書院)、伝慈鎮本は『狭衣物語諸本集成第三巻』(同)、紅梅文庫本は『狭衣物語諸本集成第五巻』(同)、九条家旧蔵本は三谷栄一編著『九条家旧蔵本狭衣物語と研究』(未刊国文資料会)の翻刻を用いた。伝民部卿筆本および平瀬本については、『校本狭衣物語』の翻刻も参考にしつつ、影印をもとに自ら翻刻した。

こうして本文を立て、注釈的読解を進めてゆくにあたり、既に研究が進んでいる深川本や流布本(これについては適宜鎌倉時代の書写本の様態も参考にする)の本文とも比較した。この比較により、異本系本文の統一的改変の質について考究した。すなわち、異本系の本文の紡ぐ物語は、他二系統と比較してどのような特徴を有しているか、それは各巻内で統一的改変と評価し得るレベルにまで達しているのか、また巻一巻二のあいだにも、主題の受け渡しや改変の統一性が窺えるかについて、考究した。

4. 研究成果

巻一については、全てについてくわしい注釈読解を進めることができた。このことにより、異本系本文が有する独自異文や独自欠文が、全体として統一的な主題意識に支えられており、それによって、プロットや結末は同じでありながら、他二系統とはかなり違う人間のありようを捉えた、異本系(半世紀ほどのちの改変)本文の質を見極めることができた。また、深川本系と流布本系は、「他二系統」とまとめるのが適当な近さを有しつつ、狭衣の道心を強調するという文脈においては、深川本系の独自性がうかがわれることも確認できた。

巻二については、伝民部卿筆本の翻刻に時間がかかり、かつ平瀬本とも確認しながらこの系統の本文の評価を行うのに時間がかかったため、全体の本文を見定めて現代語訳を施すことはできたが、語彙レベルの注釈や他二系統との本文の比較などについては、初めの方のところまでしかなしえなかった。しかしながら、伝民部卿筆本と平瀬本の非常な近さ(異本系本文部分を伝えるところのみ)が確認でき、九条家旧蔵本がこの2本とは残念ながら少し距離があることがわかった。伝民部卿筆本のない箇所は、九条家旧蔵本を底本とするしかないが、平瀬本の本文にも随時言及することとした。いずれにせよ、このように巻二の概略を確認した段階ではあるが、巻一の改変のトーンは巻二にも受け継がれていることが確認できた。簡単に言えば、以下のような傾向である。

主人公狭衣の、道心に関わる叙述をなるべく削り、むしろ両親の情愛の深さや、それゆえに両親の望まない生き方を選択できないという、親子における複雑な感情の絡みを描いている。

主人公狭衣が、永遠の憧れ源氏宮に代わる女性を求めるあり方に、明確に光源氏の色好みを重ねるような表現を持ち込みつつ、かえてそれとは違う、狭衣の恋独自の歪みを描き出している。それは薫型の道心と恋の葛藤でもなく、両親の問題と絡みついた独特の恋愛の歪みである。

飛鳥井君、女二宮といった女性たちの心情に関わる独自異文を加えることによって、受け身のまま流されていった結果、入水や出家を選ぶのではなく、最初から自らの思考をもって生き、自分自身の選択として入水や出家を選んだ女性として描かれていることが確認できた。それぞれの身の上から導かれた思考によって、二人とも「沈黙」を選択し、物語の結末に至るといふ点では同類型の人物といえる。

飛鳥井君の乳母など、脇役の人物の個性を追求することにはさほどの関心はない。

といった傾向である。

異本系本文の評価についていえば、巻二にも中納言典侍や出雲など、重要な脇役が登場するが、これらの人物の描き方が巻一の飛鳥井君乳母と比べてどうであるか(巻一では、明らかに乳母の人間像に興味を持っての踏み込んだ造型がなされている他二系統とは異なり、異本系では

ふつうの王朝物語の乳母たちと同様に、養君の飛鳥井君のために心から尽くす、ある意味良識的な乳母となっている)、あるいは巻二後半部分の仏教的文脈の色濃い部分に、異本系の独自性があるのか(巻一では仏教色を薄めるところに異本系の特徴があった)、さらに今回は全体として考究できなかったが、『狭衣物語』の和歌や引歌表現などについて、『源氏物語』と比べての大きな違いや特徴が見いだし得るのか等の問題など、積み残した課題は多い。

この他、本文の改変という点では、巻一の最初が流布本系でそのまま異本系に接続してゆく為家本、巻一が異本系で巻二が流布本系であるらしい慈鎮本、伝民部卿筆本と非常に近い異本系本文と流布本系本文とが切れ目なく繋がってゆくらしい平瀬本など、写本における異本系と流布本系との連続ぶりも気になるところではある。鳥羽上皇(待賢門院・令子内親王周辺)の時代が、こうした改変をなし得るような文学環境であったのか、時代的な問題も含め、今後さらに考えを深めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5件)

今井久代「『狭衣物語』の異文と改変」『知の遺産 狭衣物語の新世界』(武蔵野書院、2019年)。p33-52。 依頼原稿。 書籍だが、論文集であり、単著でも編著でもないのをこちらに含めた。

吉野瑞恵「『狭衣物語』異本系本文の論理 道成の造型を中心として」(『中央大学文学部紀要』123号、2019年3月)。p1-24。 査読 無。

今井久代・鶴飼祐江「『狭衣物語』巻二 異本系本文の世界 伝民部卿局筆本と九条家旧蔵本との違いから」(『東京女子大学 日本文学』144号、2018年3月)。p1-12。 査読 無。

今井久代「『狭衣物語』異本系本文の世界 飛鳥井君物語を中心に」(『国語と国文学』94巻12号、2017年12月号)。p18-35。 査読 有。

今井久代「『狭衣物語』異本系本文の達成 天稚御子降臨譚の位置づけから」(『東京女子大学紀要 論集』67巻1号、2016年10月)。p161-185。 査読 無。

〔学会発表〕(計 1件)

今井久代「『狭衣物語』異本系本文からの一考察 巻二前半、狭衣・女二宮関連の独自異文より」(「2018年度中古文学会秋季大会」)

〔図書〕(計 0件)

・単著、編著はなし。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：木谷 眞理子

ローマ字氏名：KITANI Mariko

所属研究機関名：成蹊大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 00439506

(2)研究協力者

研究協力者氏名：吉野 瑞恵

ローマ字氏名：YOSHINO Mizue

研究協力者氏名：鵜飼 祐江

ローマ字氏名：UGAI Sachie

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。